

生涯スポーツとしての剣道に関する考察

—社会人サークル KENT を対象として—

生涯スポーツゼミナール 1415033 高西 凌

1. 研究動機・研究目的

我が国では、近年の国内でのスポーツ実施率は上昇傾向にあり国民にスポーツが深く浸透してきていることが伺える。しかし、平成 24 年に新たな政策目標として「できる限り早期に、成人の週 1 回以上のスポーツ実施率が 3 人に 2 人（65 パーセント程度）」と文部科学省が定めたものの、その後は実施率が落ち込み、伸び悩んでいるのが現状である。また年代別に見たところ、20 代から 50 代である社会人のスポーツ実施率が特に低くなっているなど、実施率向上に向けての課題は多く残っている。さらに、生涯スポーツとして代表的な剣道においても総人口は約 160 万を超えるが実際の活動者は約 48 万人程度で半分にも満たず、その活動者の中でも社会人の実施率が 35%と低くなっており、他のスポーツと類似した実施率を示している。

剣道は我が国の伝統的なスポーツとされ、子どもから高齢者まで幅広い年代層の活動が可能であり、古くから親しまれてきたスポーツである。さらに、試合を通して競技的な有劣や勝敗を競うだけでなく、技術的力量を示す機会となる昇段制も存在するため、試合を行うには厳しい高齢者でも明確な目標をもって技術向上を目指すことができる。剣道は生涯スポーツとして、誰もが生涯に渡って継続していきやすいものだと考えることができる。このように、生涯スポーツとして剣道が広く認知されつつあるにも関わらず、「剣道」と「生涯スポーツ」を関連付けた研究は、これまでの十分になされてはこなかった。浅見らや鍋山らによっていくつか研究はなされているが、それは高校生・大学生、退職後の高齢者を対象にしたものばかりで社会人を対象にしたものは見当たらない。

学生生活を終え、社会人になるということは人生において大きな意味を持つことであり。それは、本人に大きく影響を及ぼすものである。また、この大きな立場の変化によって剣道から離れてしまう人も少なくない。今後の生涯スポーツとしての剣道の発展のためにも、この社会人剣道の発展が重要になってくると考える。以上のことから、社会人剣道の現状や問題点を明らかにすることは大きな意義があると考えられる。

2. 研究方法

本研究では、社会人剣道サークル KENT の参加者 8 名、運営を行う代表の佐藤を対象にインタビュー調査を行った。佐藤には KENT の運営について、8 名の対象者には各対象者についての質問後、メインとなる質問を行った。質問内容は中止理由、再開理由、活動場所、活動頻度、活動目的、運営、ケンプラの必要性についてである。

3. 主な結果と考察

中止理由については「厳しさ」「仕事」「練習場所の確保」「結婚」が主な中止理由であった。また各対象者の再開理由をもとに剣道再開における「きっかけづくり」の大切さも明らかになった。また、その手段として、環境面のサポートによる阻害要因の克服が必要であり、社会人の剣道再開において各地域とスポーツ組織の連携によりそれらを進めていくことが

今後の課題として考えられた。活動場所については「広さ」「設備」「立地条件」が主な課題として考えられた。特に KENT では駅から近く、気軽に足を運べる通いやすさはあるものの、参加人数に対して十分な広さを持った施設ではないことが大きな課題であった。元々剣道に適しているような施設は少なく、何とか地域の施設を借りているため、今後の活動者のケガのリスクについての懸念が高まった。これらについては、早急な対策が必要であり参加者からは専用の道場があればとの要望もあった。活動頻度、活動目的については KENT の活動頻度は月に 2 回程度と少なく、都合が合わないと中々参加できないため、それを補う目的で対象者 8 人は KENT 以外のサークル、稽古会を掛け持ちしていた。しかし、対象者からは KENT が一番通いやすいので、もう少し頻度が増えると嬉しいとの声も上がった。また、活動目的については対象者の 8 人中 6 人が「ストレス発散」「健康維持」を主な目的としていた。一方で、残り 2 人は「技術・体力の向上」をその目的とし、それに見合った活動頻度を求めている。このことについては、対象者本人の仕事などの私事上における両立が求められるため、KENT においては練習の開催頻度の増加を今後、検討していくべきである。運営について、運営者の佐藤は元々長いブランクがありその中で剣道を再開した一人である。その経験から、組織における剣道独特の「厳しさの払拭」、こまめな「情報提供」を特に心がけていた。そして、対象者 8 人が KENT に継続して通う理由についても、「上下関係」、「情報提供」それぞれの良さがあげられている。それ以外の理由についても先に上がった、「立地条件」の良さなどがあり、対象者の求める組織に近いものを佐藤は提供できていることが窺える。ケンプラにおいては、対象者 8 名全員が「必要である」と答え、段階を踏んで剣道ができるため、特にブランクのある社会人のニーズに応えるためのシステムとしては最適なものであり、他の組織には存在しない KENT の一番の特徴であるともいえるだろう。

4. 結論

最後に、本研究では社会人の剣道再開における課題、そして参加者が剣道を継続していくために KENT 自身が抱える課題がいくつか明らかになった。その中でも KENT はその課題を強く意識し、可能な限り社会人のニーズに合わせている組織であることが分かる。そして、社会人剣道の普及のためには地域とスポーツ組織の連携は必要不可欠であり、その中で KENT のような仕組みを備えた組織がさらに増えていくことで、今後の社会人剣道の普及につながり、生涯スポーツとしての剣道の発展が大きく期待できるのではないだろうか。また、本研究では調査対象の事情により、アンケート調査ができなかった。そのため、活動者の中でも社会人は年齢層が一番幅広いこと、それぞれが多種多様な仕事を抱えること、男女ともに活動者が多く存在することから、年齢差、職業差、性差に焦点を当てて比較することにより、剣道の生涯スポーツとしての課題がより浮き彫りにされてくるものと考えられる。この辺りの研究を今後、進めていくべきであるとし本論の締めくくりとしたい。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文を終えて、まず提出日に卒論が提出できたことに大変喜びを感じます。その際にお世話になった、黒須先生、社会人サークル KENT の方々には感謝しています。卒業後は卒業論文で得た経験を糧に社会人として立派に生き抜いていきたいと思えます。本当にありがとうございました。